

メディアを批判的に読み解く

メディア・リテラシーという言葉が新聞紙上などにも時折見られるようになった。

メディア・リテラシーというのは「メディアを批判的に読み解き、かつ、主体的に活用する能力を身につける取り組み」のことである。一九八〇年代にイギリスで活発な研究がなされ、その後、カナダやオーストラリアで積極的な取り組みが始まっている。日本では一九九二年に、私も会員であるFOT(市民のテレビの会)という市民グループがカナダのオンタリオ州の教育省が製作した「メディア・リテラシー」という本を翻訳・出版したあたりから、徐々に知られるはじめている。

その「メディア・リテラシー」(リベラ出版)という本にはメディア・リテラシーの八つの基本的な概念があげられているが、最初の四つは、「メディアはすべて構成されたものである」「メディアは現実を構成する」「オーディエンスがメディアから意味を読み取る」「メディアは商売と密接な関係にある」というものである。

具体的な例に沿って考えてみよう。たとえばここ数年、テレビや雑誌などで「緑茶はガンに効く」という情報ばかりかえし伝えられている。

私は喫茶学校の講師をしているので、数年前に「緑茶に含まれている物質にガンの抑制効果がある」という新聞記事を読んだとき、まず思ったのは、「では、紅茶はどうなのか」ということだった。緑茶も紅茶ももとは同じ茶の葉からつくられるので、同じ効果があると思うのだが、そのことについて新聞は触れていなかった。その後くりかえされるテレビの情報番組や雑誌記事などでも、紅茶について触れられることはほとんどない。



そこで、この情報をメディア・リテラシーの視点で批判的に読み解くと、以下のようになる。実は、さきほどの新聞記事には、「緑茶にガンの抑制効

果がある」という研究結果を発表したのは静岡の大学の教授と書かれてあったように記憶する。メディア・リテラシーの基本的な概念が理解できていれば、ここで「メディアは商売と密接な関係がある」ということに気づくことができる。その研究費が直接日本茶業組合から出ていたかどうかはともかく、明らかに地元経済の利益を背景に研究され、発表されたものであることがうかがえる。

ちなみに、「ガンの抑制効果がある成分」は茶カテキン、つまりタンニンということなので、これは紅茶にも含まれている。だから紅茶にも当然「ガンの抑制効果がある」ことになる。そこで、「メディアはすべて構成されたものである」ということにも気づくことができるはずである。

せいからエッセー 吉田 清彦

この記事を書いた記者に少しでもメディア・リテラシーに対する認識があれば、「紅茶はどうなのか」という疑問を持って調べ、紅茶のことにも触れる記事が書けたはずである。なのに、そういうことをせずに発表された情報だけを記事にし、それをテレビのワイドショーなどがそのまま増幅していくなかで、「メディアは現実を構成する」ということになってくる。コーヒーと紅茶とではどちらがカフェインが多いか、というようなことに関しても、同じようなことが言える。

メディア・リテラシーの第一歩は、その情報の出所がどこか、ということである。つまり、その情報はだれが流しているのか、どこから流されている情報なのか、ということを冷静に判断する必要がある。そうでないと、誤った、もしくは不正確な情報に踊らされることになってしまう。「オーディエンスがメディアから意味を読み取る」ことの大切さがここにある。

(三三)「屋台村通信」(発行人)